

# ASEAN リテラシーにつながる 学びを目指して

木村 かおり<sup>1</sup>・スザナ イスマイル<sup>2</sup>

## キーワード

ASEAN リテラシー 共生 学び合い 重層的な学び 循環的な学び

## 1. はじめに：マレーシアが求める共生へのリテラシー

ASEAN リテラシーとはどのようなものを指すのか。その一つは多民族国家マレーシアが目指す「尊重し合い共生できる」ことではないのかと考える。『一つのマレーシア』をスローガンに掲げるマレーシアのナジブ首相は、2013 年 12 月 2 日のフォーラムにおいて「『一つのマレーシア』は平和的共生と互いに尊重し合うことで可能になる。(筆者訳) (*sunday mail*. August 31<sup>3</sup>, 2014)」と国民に呼びかけた。多民族国家マレーシアにおける『一つのマレーシア』という発意は、同様に多民族 ASEAN においても「尊重し合い共生する」ことが重要であると考えて、本稿を進めたい。

## 2. 日本とマラヤ大学をめぐる留学・研修

現在、日本と ASEAN の間での留学・研修の機会は増加している。「Japan-East Asian Network of Exchange for Students and Youths (JENESYS) プログラム」(外務省)が復活し、2014 年“日本語パートナーズ”派遣事業(国際交流基金アジアセンター)が始まった。この事業では「学びあい、成長し合う、アジア」を謳っている。これに先立ち、「大学の世界展開力強化事業 Student Exchange-Nippon Discovery : ASEAN 等の大学交流形成支援」(文部科学省)として、早稲田大学は「日本語教育学」総合学習プログラムを通じた重層的・循環的人材育成事業(以下早稲田 SEND)を 2012 年開始した。今日本政府はアジアの日本語学習者の留学や研修プログラム、日本人学生の留学や研修プログラムを後押し、共に成長し合うことで、世界に誇れる人材育成を目指している。マラヤ大学(以下 UM)言語学部日本語コースは、早稲田 SEND や複数の留学・研修プログラムに参加している。

この潮流の中、マレーシアで学生を「尊重し合い共生する」人材に育てるために我々教師は何ができるか。たとえばこれらの留学や研修の機会を利用し、「学び合い」の場を準備できるだろう。なぜ「学び合い」の場を準備するということなのか。なぜなら、学生たちの間

に「学び合い」が起こるということは、D.W. ジョンソン他（1998）、杉江（2011）らが述べているように、そこに互恵的相互依存関係が生まれているということであり、筆者は、この互恵的相互依存関係が「尊重し合い共生する」ことを可能にすると考えるからだ。

本稿では、留学、研修、授業の中にどのような場を準備したら、学生たちが「尊重し合い共生する」ことを学んでいけるのかを考えるために、学生の「学び合い」を考察したいと考えている。よって、次節においてまず、ASEAN の留学・研修の移り変わり、マレーシアの留学の形態を概観し、次に留学プログラムから帰国した UM 学生の授業での「学び合い」のエピソードをまとめる。そして、UM 学生が参加した複数の日本の留学・研修プログラムを取り上げ、受け入れプログラムと UM 学生の関わり方や、筆者たち UM 教師がどのような「学び合い」の場を準備しようとしていたかを述べ、最後にプログラムへの今後の期待を述べる。

### 3. ASEAN における留学・研修の変化

2013 年、日本と ASEAN は交流 40 周年を迎えた。この間多くの ASEAN 諸国の若者が、先進国日本で、日本の技術や文化、日本語を学ぶことを目指した。30 年前、マレーシアでは東方政策が始まり、マレーシア政府は毎年留学生や研修生を日本へ派遣している。この政府派遣プログラムで学んだ学生数は、現在では 13,000 人を超えた（在マレーシア日本大使館 2011）。40 年前の留学生や研修生の動きは、多くが日本へ向かうという一方向のものであったが、徐々に日本から ASEAN 諸国、マレーシアへ向かう動きが増え、現在動きは双方向のものとなっている。

送り出し主体が日本と ASEAN 双方になったという送り出し主体の変化だけでなく、留学・研修内容の企画者にも変化が表れている。以前日本の大学等学校の学生が参加するプログラムでは、留学先、研修先（受け入れ先）がプログラム内容の企画者であった。日本の大学等学校は、主に送り出すだけで、受け入れ先が持っている学校の授業や語学コースに参加させただけであった。しかし、現在は、日本の大学等学校が学生を送り出す主体であり、受け入れ先でのプログラム内容（主に授業・研修部分）の企画者であるというプログラムが生まれている。さらに、日本の大学等学校が企画したプログラムで ASEAN や日本に双方の学生を集めて、留学・研修させるプログラムもある。そのようなプログラムの一つが早稲田 SEND であり、このプログラムにおいて日本の学生は国外に出て、その国の学生と学ぶこと、日本国内で留学生を受け入れ、留学生と学ぶことで、重層的・循環的に学びを育むことを目指している。これらの日本のプログラムは、UM 学生の「学び合い」とどう関わったのか。次節では、留学から戻ってきた学生たちの授業の中に「学び合い」を見る。

### 4. アウトバウンド（送り出し）プログラム<sup>4</sup>を通じた学生の学び合い

日本がマレーシアの学生に奨学金等を提供し、日本に呼ぶプログラムが増加した。最近、ほとんど全ての UM 日本語コースの学生が卒業までに何等かの留学や研修のチャン

スを得られるという状況になっている。最近まで、筆者らはアウトバウンドのチャンスを学部でつけた力を試すことと位置づけていたように思う。しかし、そんな筆者らに、アウトバウンドでの学びを、学生が戻ってきたときに授業においてサポートし、再び学生たちに「学び合い」をさせ、その学びを深化させるべきだと内省させた日本語授業の一コマがあった。

それは2014年10月1日の3年生のピア・ライティングの日本語授業だった。「なぜ、日本人も日本にいる留学生もマレーシアを知らないのか」という議論から始まった。

留学経験を日本語で語っていたある学生の

S:「日本人も日本にいる留学生もマレーシアのことを知らない。」

という不満の一言を捕え、私は学生たちに議論をもちかけた。

T:「なぜだろう?」

S:「日本には何でもあるし、どこに行ってもアジアやヨーロッパの食べ物があるけどマレーシアのものは置いていない……。こういうことが原因だと思う。」

S:「うん。そうそう。」

T:「じゃあ、なぜ置いてもらえないの?」

S:「皆さん、マレーシアのことがそんなに好きじゃない。」

S:「実はマレーシアは、マレーシアを代表する食べ物を持ってないが問題。」

S:「ナシゴレンがあるよ!」

…… 例の列挙 (略) ……

ここでしばらく学生たちはマレーシアの複数の民族の食べ物や衣装等、多民族であることを示す特徴を挙げはじめた。この間、学生たちは『皆さん』ということばを何回か使い、『皆さん』ということばで、日本人や欧米人を説明している。

T:「じゃあ、なぜ紹介してもらえないの?」

S:「マレーシアを紹介したい外国人がいないのよ。」

というふうに他者を原因にする発言が続いた。ところが一人の学生が、

S:「わたしたちがマレーシアを紹介してもらえるように、マレーシアのいいポイントをアピールしていない。」

と発言の中で『わたしたち』ということばを使った。

S:「えっ。何をアピールしていいかわからない。」

S:「ああ、わたしたちがマレーシアのことを知らない。」

やがて、発言は自分たちに原因を求めるものになる。そして、

S:「わたしたちがマレーシアのこと知らなきゃ、話せない。」

と、彼らは日本での経験を語ることをきっかけに自分の国のことを考えはじめた。

(S:は学生のことば、T:は筆者のことば、それぞれの文意を要約して記述)

木村のフィールドノート (授業観察記録 20141001) より

もし、この時、一人の不満を議論へと進めていなかったら、学生の何人かは「みんながマレーシアのことを知らない理由は、どこに行ってもアジアやヨーロッパの食べ物があるが、マレーシアのものをあまり置いていないことが原因」だと思ったままだったかもしれない。仲間と議論することで、意見は再考され、気づきに変わっていったのだと考える。私たち教師は、こういう議論が起こる仕掛けを授業の中にもっと作り、留学や研修を経験で終わらせず、学びとなるようにサポートする必要があることに気づいた一コマであった。

上記の議論の後、クラスでは「日本人に何を知ってほしいか」という話し合いになり、ある学生は、マレーシアと日本の戦争の歴史と答えている。これは、この学生が日本留学中、日本とマレーシアの戦争のことを話したとき、日本人学生が全く知らなかったからだという。この学年の学生たちは、次学期には、マレーシア国立博物館に行き、日本人日本語ボランティアからマレーシアの歴史の説明を受け、質疑応答をしながら見学をするという課題がある。学生は、日本人からマレーシアと日本の戦争の歴史の説明を受け、また新しい気づきを得るだろう。こうやって、学生たちは楽しく「共生」することを目指すのではなく、不満や悲しい気持ちをマレーシアで、国外（日本）で、ぶつけ合うことで終りなき「気づき」を繰り返し、アジアで「尊重し合い共生する」ことを学んでいくのだと感じた。終りなき「気づき」、このような気づきこそが循環的な学びなのではないだろうか。

## 5. インバウンド（受け入れ）プログラム<sup>5</sup>における重層的な学び

終りなき「気づき」に循環的な学びがあるとしたら、どのようなものを重層的な学びと呼んだらいいだろうか。これをインバウンドの例から考えてみたい。例えば、日本人学生がUMの講義を受けることを目的としたプログラムがある。このプログラムでは、UMの既存のカリキュラムに合わせUMの学生のために作った授業（講義）に日本人学生が参加する。このプログラム形態は、半年ないし1年の留学として実施されることが通常であるが、最近、「留学体験を体験する」ということで、数時間だけ既存の授業に日本人学生が参加するものがある。このプログラムでは、日本の送り出し校がUMの通常の授業に日本人学生をゲストの聴講生として参加させている。この場合、研修目的と一致した内容の講義や興味のある講義に対して、日本人学生が集まるのではなく、日本人学生は研修日程に合う講義に参加する。このプログラム全体では、マレーシア人との交流は意図されているが、UMの授業の中での日本人学生とUM学生の「学び合い」は目的とされていない。

しかし、双方の学生が講義を聞いて話し合ったから、「学び合い」が起こるというわけでもない。例えば次のようなプログラム形態があった。日本の高校が日本人生徒のための授業（講義）をUMの教員に依頼し、その授業の数時間、日本人生徒とUMの学生が共に参加するものである。授業目標には「交流」、「協力連携を学ぶ」、「文化を学ぶ」が掲げてあり、学生らが講義等を聞いて討論するというものが多い。この授業は日本の高校のカリキュラムの一環であるが、UM学生のカリキュラム内の授業ではない。また授業実施は来学する高校のスケジュールに合わせる。したがって、UM学生の参加は任意であるが、授業を成立させるために、学生に参加協力を促さなければならないものとなっている。

実施したものを振り返ってみると、事前に日本の高校教員と UM 教員で授業打ち合わせを行い、その授業の到達目標を共に考えたが、その授業の UM のカリキュラムの中の位置づけを日本側に考えてもらえたわけではなかった。帰国後、参加高校の教員や生徒から集めた報告に目標達成感と満足感が読み取れたが、この授業に参加した UM 教員からは「同じような年齢、レベルの学生と交流活動をさせたほうがよかった。」という声が聞かれた。これは、本授業の目標とは別に、UM 学生の到達目標を設定して授業を作れば、聞かれなかった声ではないかと推察する。

交流活動を授業として行うのであれば、UM 学生を「高校生が学ぶためのボランティア」でなく、「学び合いのパートナー」としての参加に位置づけないと、「何のために他校の授業をつくらなければいけないのか。」と教員が感じてしまう。日本の高校側を UM の学生や教員が「学び合い」のパートナーとして位置づけられるような授業を企画できなければ、そのプログラムの継続は難しくなるだろう。しかし、このような企画は UM 側の努力だけでは不可能である。授業を依頼する日本の高校側の理解と協力も必要である。高校側も高校生のための授業を依頼するだけでなく、UM の学生に必要な交流活動はどのようなものか考慮するべきである。ここで取り上げたのは、高校のプログラムであるが、大学のプログラムにも同じような形態のものがある。今後双方で受け入れ方について検討すべきである。

3つ目の形態のインバウンドは、日本人学生が活動目的を持って、UM を訪れ、主体的に活動し、UM 学生と共にその活動を作っていくことを意図するものである。この形態のインバウンドの内容は、1) 授業として、日本人学生や UM 学生双方がプレゼンテーションをし、それに対し討論をするというものと、2) UM の授業や放課後に、日本語の教壇実習や日本文化を紹介するミニワークショップを行うというものと、2つに分けられる。一方の発表を聞くだけで終わらない双方の学生による活動型のインバウンドでは、学生は十全的に参加していることを実感できる。特に課外活動として行うような 2) では、活動を UM 教師が作るのではなく、日本人学生が変化に富む活動として作るため、UM 学生が自然に応援、参加するような仕掛けとなっている。

例えば、早稲田 SEND では、早稲田の学生（以下早大生）が UM の日本語選択科目のクラスで、教師として UM 学生にひらがなを教え、日本語主専攻のクラスで TA をし、放課後にはインストラクターとなり、UM 学生に日本文化を紹介した。つまり、早大生は UM 学生に教えたいことを準備して、マレーシアに来た。しかし、早稲田 SEND プログラムは、それだけを目的としていない。スケジュール管理も自分が学ぶべきことも、自分で考えて、自分で見つけなければならないプログラムである。ある早大生は、ここに来て、自分が勉強しなかったことは何だったんだろうかと思い悩み、「帰りたい」と考えたようである。

しかし、UM 学生はそんな早大生を見ていた。UM 学生のために活動の準備をし、自分たちで市バスに乗り、食事に出かけ、頑張っている早大生を見ていた UM 学生は、感謝や応援の気持ちを持って、活動に加わり、時には食事を共にしていた。UM 学生たちにとっては、任意参加の活動であるが、プログラム内での UM 学生の位置づけも明確であり、自分の役割と責任を実感できるこの活動に多くの UM 学生が参加した。そして、そんな

UM 学生のリアクションに、「帰りたい」と思い悩んでいた早大生が今まで自分がしてきたことに自信を持ちはじめた。この学生の2週間の成長振りは目を見張るものがあったが、他の学生もさまざまなことを学んでいった。

そして、UM の学生たちもまた、このようなインバウンドに参加しながら、授業で学んだこと、アウトバウンドで学んだこと、生活の中で学んだことを、違う視点を持つ学生たちと内省し合った。積極的に活動に参加している学生を見ると、このようなプログラムを通して、学生たちは違う視点に気づくだけでなく、様々な視点との「学び合い」の中に他者と「共生」すること、「尊重し合う」ことを学んでいくのだろうと感じた。早稲田 SEND は、このような「学び合い」が意図されたプログラムの一つであると考える。このような「学び合い」にこそ重層的な学びがあるのではないか。

## 6. おわりに：今後のプログラムへの期待

マレーシア人学生の日本留学後の授業、日本人学生の受け入れ留学・研修を振り返ってみると、ASEAN の受け入れ側教師が日本の学生たちを日本のプログラムとして受け入れ、そこに ASEAN の学生を出席させるという授業づくりでは、十分な「学び合い」を起こせないことを改めて感じる。ASEAN と日本の双方の教師たちが、その留学や研修の課題と意図を共有し、日本のプログラムを協働でデザインすることではじめて、「学び合い」の場が準備できる。この点において、早稲田 SEND は共同プログラム委員を任命し、共同プログラム委員会を設置し、課題と意図の共有が試みられている。今後も、さらに他のプログラムでも、ASEAN の大学の教師を共同プログラム委員として位置づけ、十全たる参加を促すべきである。日本のプログラムを日本と ASEAN の教師とで協働で作ることで、日本のプログラムが日本人学生のみならず ASEAN の学生にとっても「学び合い」の場として活用できるものとなることを望む。そして、さらに日本のプログラムが ASEAN の学生同士の「学び合い」の場構築の嚆矢となり、ASEAN において「尊重し合い共生する」ことを学ぶ機会が増えることを期待する。

## 注

- 1 きむら・かおり（マラヤ大学言語学部アジア・ヨーロッパ言語学科）
- 2 すざな・いすまいる（マラヤ大学言語学部アジア・ヨーロッパ言語学科）
- 3 8月31日は独立記念日であり、本談話は当日の新聞 *sunday mail* に再掲載された。
- 4 マレーシアを起点とし、マレーシア人学生を日本に送り出すものをアウトバウンドとする。
- 5 マレーシアを起点とし、マレーシアに日本人学生を受け入れるものをインバウンドとする。

## 参考文献

- 杉江修治（2011）『協同学習入門 基本の理解と 51 の工夫』ナカニシヤ出版  
 D. W. ジョンソン・R. T. ジョンソン・E. J. ホルベック（1998）『学習の輪 アメリカの協同学習入門』（杉江修治・石田裕久・伊藤康児・伊藤篤訳）二瓶社（原著は 1993）  
 Zuriari AR. 10 things about: Malaysia, our home. *sunday mail*. August 31. 2014: 36